

論文

# アメリカニゼーションと R.E. パークの Race Relation Cycle 論 —国家の理念と社会学—

内藤 辰美  
佐久間 美穂

## Americanization and R.E. Park's Theory of Race Relation Cycles — Dream of State and Sociology —

Tatsumi Naito  
Miho Sakuma

この論文でわれわれはパークのレイス・リレーション・サイクルを検討する。まず、アメリカ社会学へのパークの貢献について述べ、次に、彼の社会的見解に対する諸批判、特にエツィオーニ (Etzioni A.) の見方を検討する。エツィオーニがいうように、パークのレイス・リレーション・サイクル論はこの分野の研究に貢献した。しかし、彼が指摘しているように、パークの主張はアメリカの状況に妥当しない。パークのレイス・リレーション・サイクルは理論というよりは、仮説と呼ぶほうがより適切であろう。

キーワード：シカゴ学派、Race Relation Cycle、旧移民と新移民、同化、排日移民法

### アメリカ資本主義の発達と新・旧移民 —問題の所在として—

都市は文化的存在である。都市の定義に異質性という一項が加えられるのは単に都市が多様な職業の人びとによって構成されているというだけでなく、本来的に多様な民族の定住と交流を、したがって多様な文化交流を前提にしているという意味である (Durkheim, 1893=1971 田原音和訳)。パークをはじめとするシカゴ学派の人びとが都市を多様な文化的存在としてとらえたのも、彼らが研究の対象としたシカゴがその色彩を濃厚に宿していたからであった。シカゴの民族コミュニティは、独自の文化的世界であった。シカゴにおけるコミュニティの多くが独自の文化を持つ「移民」によって形成されていたことは、都市に、そして

アメリカに、ひとつの課題を与えることになった。都市における多様な民族・文化の調和・融合という課題がそれである。同化は、多様な民族・文化の調和・融合において課題であっただけではない。それは、都市の秩序維持、社会統制におけるキイ概念であり、アメリカにおける民主主義の発展という国家目標にかかわる概念であった。

しかし、同化—アメリカニゼーション—という理想は、アメリカの社会に夢と緊張をもたらした。移住者、とりわけ新移民といわれる移住者にとって、同化は、アメリカにおいて夢を実現させるために超えなければならない壁であった。しかし、<アメリカ人になる>という期待はいくつもの壁にぶつかり新移民を苦しめる。同化は、新移民やマイノリティにとってアンビバレントな概念であ

る。ドミナント・グループに同化することはマイノリティとしての自己の生活世界を脱することであり、ドミナント・グループの価値こそが、アメリカという国家の基礎であるということを承認することである。アメリカという社会と国家の文化的目標は、そして、その目標を達成するための制度的手段の構築はそのようなものとして存在した (Merton.R.K. 1947=1961 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)。同化がそうしたものである限り、ドミナントの価値は、アメリカの目指す理想として機能することになる。それは、アメリカの社会と国家における目標、見方を代えてみれば、「公共の基準」を形成する。そして、そのことは、必然的に（裏返しとして）、同化から距離を置くマイノリティは、非公共的存在であり、その価値はドミナントの価値に従属するという考えを定着させることになる。もちろんマイノリティには時代や状況においてちがひがある。ある時代・状況の下では、南東欧地域からの移民が、またある時代・状況では、中国人・日本人を中心とするアジア系移民が、そして、メキシコ人がその対象となる。しかし、マイノリティとして特別に意識されたのはユダヤ人であった。

アメリカ資本主義がその発展において、絶えず低廉な労働力を求めていたことは歴史が証明する。アメリカは産業革命の過程で膨大な数の新移民を受入れた。多くの新移民が産業革命以降に成長を見せた都市に流入した。シカゴはその典型であった。1800年中頃からアメリカにおける移民はそれ以前における北西欧からの移民（旧移民）に代わり、南東欧からの移民（新移民）が主流を占めるようになった。バージェス (Burgess, E., 1925 = 奥田道大訳) のいう遷移地帯は主にそうした新移民によって形成されたものであり、それはシカゴだけでなく成長するアメリカの都市に共通する現象であった。英語を十分使えず、熟練し

た技能を持たないままに、母国における農業社会・農村を生き、いきなり工業社会・都市のアメリカにやってきた移民たち。その移民たちが定住した地域が成長する都市シカゴの遷移地帯であった。かれらは、アメリカという国に、もっと具体的にはシカゴという都市に、小さな母国を形成した。パークが「自然地域」と呼んだ移民のコミュニティ、ジェーン・アダムスがハル・ハウスで支援と教育の対象とした新移民は、アメリカのドミナント・グループからみれば、多分に異国あるいは異国民であり、同化の対象であった。ミルズ (Mills, W.) はいう。「ハル・ハウスにおいて、移民がヴィジョンの中心に置かれていた。既に指摘したように、彼らの存在は階級問題として取り上げられず、むしろ政府機関からは、操作すべき<ナショナリズム>という観点から扱われたのである。このパースペクティブのもとでは、彼らを現存の社会に同化するということが目的であった」 (Mills W. 1964 = 1969 本間康平訳、228)。事実、ジェーン・アダムスのハル・ハウスも、移民をアメリカ人にする、移民が公共的存在として認められること、アメリカ民主主義の担い手となることを意識した (Adams, J., 1951. = 柴田善守訳、1969)。

同化をナショナリズムと一体化させ、その視点から同化に迫る同化主義の立場からすれば、移民のコミュニティは多分に非公共的な空間であり、そこに居住する移民たちは多分に非公共的存在であった。移民のコミュニティと移民たちを非公共的存在から解放するためには、言葉を換えて彼らが居住する都市を公共的なものにするためには、同化が必要であった。ドミナントと公共の問題が一体として括られるところにこの問題の本質＝鍵 (アメリカにおける社会と国家の特殊性、アメリカナショナリズムの特殊性) がある。そこでは、公的生活と私的生活が峻別されず、適応と同化の

ちがい明確にされず、本来、部分的な公的生活 = 公共の秩序が、あたかも無限に、私的生活を包摂するかの如き雰囲気醸成した。そして、ミルズがいうように、新移民のコミュニティをナショナリズムの立場から統制することの正当性を醸成した。小論はそうした認識に発するものであり、またその検討をパークの Race Relation Cycle に求める試みである。

## 1. パークの社会学と Race Relation Cycle

人種・民族関係の社会学的研究においてロバート・パーク (Park R.E., 1864 ~ 1944) は重要な位置を占めている。パーク以後の現実が、必ずしも彼の研究を肯定するような方向に進んでいないにもかかわらず、パークはこの分野における魅力的な先駆者である。多少具体的に見れば、「よく知られたパークの Race Relation Cycle は社会学的思考に対する偉大な貢献である。しかし、これまで広範な議論と論評があったにもかかわらず、その理論的可能性については検討の余地を残している」(Lyman S.M. 1968, Spring, 22) というライマンの指摘が示すように、彼に関する評価は定まらないところがある。パークの学説には、評価がある反面、しばしば批判の対象となる、あるいは全面的に肯定されない内容があることも確かなのである。エツィオーニ (Etzioni A.) が『ゲットー』の再検討 (パーク=ワースの再評価) を要請するものもその現れであろう (Etzioni.A. 1969, Social Force, 37)。

パークに向けられるそうした疑問は何処に出るものか。それは多分に、パークの社会学あるいは社会学観と関連する。少しくパークの社会学に対する認識を見ておくことにしよう。周知のように、パークは社会学について、〈集合行動に関する科学〉(Park R.E. & Burgess E., 1921, 42 ~ 43) という規定を与えている。パークにおけるそのよ

うな規定は、パークが人間性を社会的に培われる、いわば集合行動の所産とみていることに関係する。すなわち、パークは、individual と person とを区別する見方を採用し、生物的個体としての individual が、地位—社会内におけるポジションを獲得してはじめて person になると考える (Park.R.E. & Burgess E. 同上、55)。パークは、その時代のすぐれた思想家達とともに、人は人間として生まれるのではなく、人間になるのだと考える (Park.R.E. & Burgess E. 同上、79)。人間は、かくして動物から区別されることになるのであるが、人間を動物から区別するものは、集合行動であり、人間のもつ経験的世界、コミュニケーションと学習による世界である。パークによれば、人間における協同は、それがコミュニケーションにもとづく文化的社会であるところにその特徴がある。動物の場合は、社会的であるより、共棲的である。厳密な意味での社会は、合意、慣習、共通理解のうえに成り立つものであり、その意味から、コミュニケーションや道徳的秩序は社会が存続するための前提をなすものである。パークのいう社会は、かくして、コミュニケーションとしての、相互作用としての社会であり、社会的所産としての人間性もまた、コミュニケーションや相互作用の視座において捉えられることになる (Park R.E. & Burgess E. 同上、161 ~ 164)。

ところで、人間性をコミュニケーションや相互作用の視座から捉えようとする試みは、彼の生きた時代の思潮であり、いわば常識的範疇を超えていない。しかし、その常識的視座も社会過程に関する見地からの整理を得て、race relation cycle に関する仮説 = 研究の枠組みとして、アメリカ社会の問題解明に迫る試みにまで援用されるとき、それはひとつの独自性をもったものになる。バージェス (Burgess, E.W.) との共編による有名なテキストにおいて、整理された形で記述された社会

過程の見地、競争 (competition) → 闘争 (conflict) → 応化 (accommodation) → 同化 (assimilation) という社会過程論は、race relation cycle にも適用されてくる。

競争は、もっとも本能的あるいは individual に近い次元での相互作用であり、無意識的な相互作用である。それは、無意識的であるという点で、闘争、応化、同化とは区別される。競争はそれが意識的になるとき闘争となる。競争と異なり、闘争は常に意識的であり、それは深い情緒、強い情熱を呼びおこす。競争も闘争もともに闘いの形態であるが、競争はそれが連続的であり、インパーソナルであるのに対し、闘争は断続的であり、パーソナルである。応化は、個人や集団が、闘争によって作り出される社会的諸状況に対し、内部的調整を必要としている過程である。応化の問題は社会的経験のレベルの問題である。たとえば、文化や伝統は社会的経験の中で獲得され、闘争によって作り出される諸状況に対し、調整的機能をはたしている。同化は、個人や集団が他の個人や集団の感情や態度を取得する相互浸透・溶解のプロセスであり、いうならば、他の個人や集団の経験と歴史を内部化することによって、共通な文化的生活に組み込まれていく過程である。パークによれば、社会は、〈統制的組織〉であり、それ故に、社会統制は社会の中心問題であり、同時に社会学の中心的課題であった。社会、とりわけ都市は競争を露わにするが、都市もまた社会であり、統制的組織であることを求めるはずである。彼は社会過程論を意識によって二分し、競争と闘争・応化・同化を区別する二分法的理解を採用するのであるが、二分法的理解とは、競争すなわち無意識的本能的過程が、闘争、応化、同化といった意識的な過程によって統制されるという発想にほかならない。パークはその発想のなかに都市の秩序を求めたのであった。社会過程論は社会統制の見

地から用意されていたことが明らかである (Park R.E. & Burgess E. 同上、504 ~ 784)。

パークの展開する race relation cycle は、おそらく、彼の「社会は統制的組織である」という「社会」の認識と密接に関係する。それは、ドミナント・グループとマイノリティ・グループとの関係に焦点を当て、そこに生起している、あるいは生起してくる問題を理論的に克服しようとする試みであり、少し立ち入って推測すれば、アメリカの都市と社会が統制的組織であることを期待するパークの願いが込められていると言えよう。

以上のように、パークにおける race relation cycle は、アメリカ社会に対する彼の期待を込めたものであったが、そうした期待のみによって創られたのかといえそうではない。パークにおける社会過程論、race relation cycle 論について言及するならば、それがなによりも、パークが社会学に求めたもう一つの態度 = 認識、社会学に科学化を求める彼の態度 = 認識と関係していると見なければならぬ。パークが目指していたのは「法則科学としての社会学」であった。より限定して言えば、パークは彼が主導したシカゴ学派の社会学を事実や問題を単に説明する学問以上のものにしたと考えていた (Park R.E. & Burgess E. 同上 11、45)。パークが社会学に科学性を求めていたことは、バージェスとの共編の著作に、*Introduction to the Science of Sociology* というタイトルをつけ、Science としての社会学を強調したことにも現れている。と同時に、パークは自らが主導するシカゴ学派の社会学を、ハル・ハウスのようなセツルメント運動から区別したいとも考えていた。秋元はそれを、「ハル・ハウスとシカゴ大学とは、決して一貫して緊密な関係を持ち続けてきたわけではない。というよりも、そこには蜜月の後の不信に満ちた一時期が両者の間に介在している。たしかに成立期のシカゴ大学が、大きな野心をもつ

て既存のアカデミズムに挑戦を試みていったとき、そこに社会改良をめざす幅広い活動との提携があったことは疑いない。その際、シカゴ大学の社会学にとって、現実をみつめ、自己を練磨していくうえでハル・ハウスの存在はなくてはならないものだった。また、ハル・ハウスにとっても、シカゴ大学は汲みつくし得ないよう知的源泉であった。・・・それにもかかわらずやがて両者のあいだには、対立といえないまでも、わだかまりをもった冷たい関係がまちうけていた。・・・なぜそうなったのだろうか。・・・その一因をアダムスが初期のハル・ハウスを超えて自らの活動をより大きなあるいはより深いアメリカ問題に向けたことにあるのではないかという見方は重要である。しかし、それだけでは両者の関係を説明しきれない。・・・ではその根にひそむ対立の要因とは何だったのだろうか。一言でいえばそれは、社会学というひとつの経験科学と、ソーシャル・ワークという実践的活動とが、その展開の過程で不可避的に経験しなければならなかった緊張関係であり、そのなかで相互に求められてきた自己確認の問題であった」(秋元律郎、2002、27)と説明する。この秋元の見方「社会学というひとつの経験科学と、ソーシャル・ワークという実践的活動とが、その展開の過程で不可避的に経験しなければならなかった緊張関係」であるという見方は、パークとシカゴ学派の理解にとって記憶に価値する。

パークの場合、社会過程論も、race relation cycle も、「法則科学としての社会学」を追及する彼の立場に発した社会学的仮説であった。パークによれば、社会学をこのような法則科学として位置付けることは、社会学の発展にとっても、アメリカ社会の現実的問題の解明にとっても有用なはずであった。アメリカ社会における重大な社会問題、同化の問題について言えば、同化の問題は、科学的分析枠に基づいて研究・解明されるべきで

あった。フレームワークを設定した研究こそが法則科学としての社会学の発展に必要であった。<sup>1)</sup>

## 2. パークの Race Relation cycle における意義と限界

周知のようにパークはシカゴを自然地域、あるいは、隔離された諸民族のモザイクとして把握した。それは、1917年の論文『都市』においても指摘された彼のシカゴに対する基本的認識である。その認識はワースの『ゲットー』に寄せた序文にも簡素な形で示される。「調査によれば、アメリカの大都市は、人種、文化あるいは単に信仰上の相違によって、隔離された諸民族のモザイクをなしており、それぞれがその固有の文化形態の維持と、独自で類のない人種観の固守に努めている。これらの個々に隔離された集団は、自らの集団生活の安穩を支えるために、例外なくその構成員になんらかの道徳的孤立を押しつけるべき努力をはらっている。隔離が、かれらにとってその目的への手段となる限り、あらゆる民族とすべての文化集団は、自らのゲットーを創造し維持するといえよう。こうしたことから、ゲットーはいわゆる“同化主義者”と呼ばれる人々が打破しようとしている一種の道徳的孤立の物理的象徴となっているのである」(Wirth, 1928=1971 今野俊彦訳、序文)。本来、「ゲットーということばは一都市のユダヤ人地区を意味するものであるが、このことばは少なくとも五百年の間、日常的に使用されているのにもかかわらず、その語源はあきらかではない」(Wirth, 1928=1971 今野俊彦訳、14)。ゲットーは歴史的にみればユダヤ人の居住区を意味する概念であるが、パークは、シカゴにおけるゲットーをユダヤ人のコミュニティに限定せず、すなわち、固有名詞としてでなく、普通名詞-隔離されたいかなる人種集団ないし文化集団にも適用される用語-として用いている。ゲットーはパークが

自然地域と呼ぶもののひとつであった。パーク＝ワースは、ゲットーにみられる隔離はやがて変容し、ユダヤ人もアメリカ社会に融合し、いずれは同化するであろうと推測＝期待した。パークの認識によれば、ゲットー、自然地域は、アメリカ社会の重大問題であると同時に、その科学的解明は社会学に与えられた重要な課題であった。パークにおいて、ゲットーや自然地域の解明と同化の問題は不可分に結びついており、彼の言う科学的な社会学は、その結びつきを解明する任務をもって登場するのである。

しかし、現実にはパークの期待通りに動いていない。それにもかかわらずパークは楽観的であった。パークは同化が容易に可能であるという見解もとらなかったが、絶対に不可能であるという見解にも立たなかった。ただ言えることは、隔離に、自然地域と彼が呼んだゲットーに、彼はアメリカの未来を見なかったということである。反対に、パークが未来に見たのは、隔離＝ゲットーや、しばしばそれに付着するナショナリズムやエスノセントリズムが、数世代を経て解消されていく姿であった。パークは世代によるゲットーの変容に期待した。「今日、あらゆる大都市によく認められる移住民居留地において、外国人はイースト・ロンドンの住民とは異なるが、しかしある点ではヨリ完全に孤立した状態の中で生活している。その違いは、これらの小居住地（移住民居留地）のそれぞれが、多少とも独自のそれ自身の政治的・社会的組織を持ち、また多かれ少なかれ強力な国家主義的宣伝の中心地となっているという点である。たとえば、これら集団のいずれもが母国語で印刷した一種類、あるいは数種類の新聞をもって。・・・このような条件があればこそ、これら移住者が故国からもってきた社会的慣習や道德的秩序が、アメリカの環境の影響にありながら、長い間それを維持することができたのである。し

かしながら、母国の規範に基礎をおく社会統制も、三代にわたると破壊されてしまうようである」(Park R.E. =1965年笹森秀雄訳、79～80)。彼が同化に期待を寄せていたことはまちがいない。それだからこそ、パークは、彼の社会過程論と race relation cycle を援用して行われた調査、ワースの『ゲットー』に、「本書は歴史における不可思議で悲劇的な状況の一つに対し、新たな光を投げかけている」(Wirth, L. *The Ghetto*, 1928=1971今野俊彦訳、序文5)という評価を与えたのである。それは偶然の仕業ではない。パークは、ワースの『ゲットー』に、自己の主張、同化の可能性を見出した。『ゲットー』は、パークの仮説を援用して書かれ、同化に関するパークの楽観主義を支援した書物であった。以下、ワースの『ゲットー』から、パークの社会過程論と race relation cycle に依拠するワースの記述を、いくつか見ておくことにしよう。そこにはワースの調査に、自己の社会過程論と race relation cycle の検証を求めるパークの期待がある。

「ユダヤ人は北に向かって群がっていったので、ブロンクスの荒地を発見した。・・・現在そこには、イースト・サイドのユダヤ人とは全く異なったブロンクス・ユダヤ人の一族がいる。それは二世のユダヤ人であり、外面的特徴としてはあご髭も口髭もなく、野球をし、勝負事の大ファンであり、商業的娯楽者であり・・・」(Wirth, L. 1928、同上、299)。

「ラウンデル (ローンデル)・ユダヤ人の一群がいる。かれらはドイツ的な様式を好むことから、ゲットーでは、かれらをドイチュクス (*Deitchuks*) と呼ぶ。かれらはコーシエルの食品にそれほどやかましくなく、それほどたびたびシナゴークへ行かず、娯楽はもっぱらループに求め、家庭にあってのみイデイッシュ語を用いる。ゲットーのユダヤ人

が、ラウンデルをドイツランド (*Deutschland*) として名ざすゆえんはそこにある」(Wirth, L. 1928、同上、299)。

「これらの類型は物語る。ラウンデルによって代表される文化領域は、ゲッターの性格がより幅広い接触とより大きな世界の影響化で練り直されていく過渡的な地域であると。さまざまな社会的タイプを示す人々は、集団の生活の場を求め、その地域の文化が変化するにつれて、その地位と性格を変化させる。それはあたかも衛星の小さな群れが個々の星に型どられた姿や星座に位置するように、自らを配列する。それらは一群となって、集団の文化があらゆる表現を示すように、一種のパーソナリティの銀河を構成する」(Wirth, L. 1928、同上、301)。

「ゲッターにおけるシナゴークと共同体の宗教生活は、おもに正統派のそれである。それが第二の入植地では、<保守的>となり、辺境地域では<改革的>となるのである。しかし、変化は、突如として遂行されるものでもなければ、また完全でもない。ゲッターは、古い世代の人々、つまり新しい生活様式に全く慣れようとしなない生活を送る人々によって、存続されるものではないのである」(Wirth, L. 1928、同上、307)。

「いかなる移民集団であっても出会うものとして、後継世代の問題がある。この点は次の事実によって説明される。つまり、移民自身は、その生涯にあって新しい集団に完全に同化することがまれであり、また犯罪者ともならない。しかしその子どもたちは、同化するようになり、同時に移民集団の解体と犯罪問題が生じてくるのである。ゲッターは、社会生活においてもっとも重要なものは、ある民族の名状しがたい感情、夢、理想であるよりも、実利に則して生きていく、民族のエクスターナルな組織というものの<厳然たる>存在であることを示している」(Wirth, L. 1928、同

上、348)。

さて、以上のようなパーク＝ワースの『ゲッター』に対する認識、あるいは研究方法については批判も少なくない。パークの研究は、人種的關係と文化的接触の分析に多くの着想を与えてきたというヒューズの指摘や (Hughes E.C., *Race and culture* への序文)、パークの race relation cycle は、それをモデルとしてみた場合、社会学的企てとしては依然として最も実りあるものであるというライマンの指摘 (Lyman, S.M. 1968, Spring, 22) のように、人種・民族関係＝同化を扱った先駆的な社会学者の業績として評価されている一方、彼は自説にとって都合の悪いデータについて、それを自己の理論が持つ欠陥というようには考えなかった (Lyman, S.M. 同上、18) とか、race relation cycle に関するパークの最大の弱点は、一連のサイクルを必然的なものと仮定したことにあつたという批判 (Lipset, S.M. 1950, 479) にもさらされているのである。およそ、パーク＝ワースの研究は、モデルないし仮説とみられるべき内容のものであって、それが科学的検証を得ていない以上、理論の域には達していないというエツィオーニの批判も同様である。

以下、エツィオーニによるパーク＝ワースの批判について、その要点を見ておくことにしよう。パークの race relation cycle と、その応用であるワースの『ゲッター』には、共通する限界が存在する。パークの race relation cycle は、その性質上、仮説やモデルと見るべきものであって、理論とは言い難いものである。natural history や、eventually というパークの言葉がよく示しているように、それはテストされていないアプリオリな結論であり、厳密性に欠け、曖昧である。パークの race relation cycle では、プロセスとステージについても明確な指摘がなく、たとえば、何が、

応化から同化への移行を導くのかという条件に関しての分析が見当たらない。パークの race relation cycle には「いかなる条件」という科学的作業に不可欠な前提が欠けており、cycle は必然的な方向に、直線的に動くものと仮定されている。しかし、cycle は進化的であるよりも状況改善的であるから、その点でもパークの cycle は欠陥を抱えている。そうした不備は、おそらく、パークが cycle を自然史的過程とみて、いずれはそうなると考えていたことによる。そうした見方や説明は科学的と言ひ難い。そうしたパークの態度は、自己の主張に反駁的な、あるいは不都合なデータを無視していることと関係がある。ワースは『ゲッター』の中で、ライフ・ヒストリーやヒューマン・ドキュメントを自己の仮設や都合に合わせて活用しており、それは、自己の主張に反駁的な、あるいは不都合なデータを無視するというパークの態度に通じている。ワースはゲッターを心の状態とみて、ゲッターは解消され、いずれ (eventually) 同化に向かうと判断するのであるが、その考えはパークの理解に通じている。集中的な居住=凝離は解消し、いずれ、ゲッター・自然地域における民族集団も同化に向かうといのは仮設であって、それが確かである事実はない。ワースはヨーロッパゲッターとアメリカゲッターの違いを指摘し、アメリカゲッター=新しいゲッターに同化の可能性を見て、ラウンデル地区にその具体例を求めているのであるが、新しいゲッターの居住地域に関しては十分な研究がなされているわけではない。もうひとついえば、パーク=ワースにみられる特徴は、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへというテンニース (Tönnies, F.) の研究に同調していることである。テンニースによれば、ゲマインシャフトはゲゼルシャフトに向うことになるし、ゲマインシャフトの要素の強い segregation はゲゼルシャフトに向かう中で消滅

することになる。しかし、ゲマインシャフトも segregation も簡単に消滅しない。現実には、部分的な segregation、部分的な同化があるのであって、ゲマインシャフトからゲゼルシャフトへという考え方がそのまま適用されるほどアメリカは単純な社会ではない。パーク=ワースは彼らの自然史的過程 という呪縛から解放されず、第3の途の可能性というものをみていない。アメリカは多元主義の社会・国家であるが、民族集団だけでなく社会構成総体がアメリカの多元主義を形成しているのである。社会過程をもつばパーク=ワースに沿って理解する必要もない。社会過程には多く形態がある。同化を cycle の最後のステージに位置づける必要もない。同化はパティキュラリズムの排除のみを意味するものでないからである。同化には、グループ間の闘争、グループ間におけるあるグループの優位性の確立という一面がある。うまく運んだ同化はバランスのいい関係があつて初めて可能になる (Etzioni A., 1959, 225 ~ 262)。

以上、要するに、パーク=ワースの race relation cycle には、いくつかの重大な問題が含まれているというのがエツィオーニの主張である。その中心は、パーク=ワースのそれが、はたして科学的か、現実を有効に説明しているかということに集約されるであろう。科学的というには手続きも検証も不十分であり、現実を説明しているかと言えばその理論がカバーし得ていないところが多い。パーク=ワースは「いずれ」という見方をするが、現実的には、エツィオーニのいうように、部分的な同化があるという見方が妥当であろう。エツィオーニの批判で注目されるのは、同化をもつばパティキュラリズムの排除と見る見方に修正を求めている点である。すでに見たように、パークによれば、同化は、個人や集団が他の個人や集団の感情や態度を取得する相互浸透・溶解のプロセス

であり、他の個人や集団の経験と歴史を内部化することによって共通の文化的生活に組み込まれる過程である。実際には、マイノリティの側からのドミナント側への同化が一般的な構図である。もちろん、同化が相互浸透のプロセスを意味する限り、ドミナントな文化への追従を強調する必要はないようにも考えられよう。しかし、現実の問題として同化の問題は、一定の支配・被支配関係のなかに生起するものである。そうした状況を考慮に入れた場合、同化について論ずる場合には、当該社会における支配・被支配関係の視点抜きに追求、解明することは難しい。エツイオーニの認識もその点にかかわるものであろう。

かくして、race relation cycle としてパークの示した楽観的態度は、エツイオーニやリブセット、そして、ライマンらによって厳しく批判されるのであるが、パーク自身、楽観主義に陶醉していたわけではない。パークによれば、統制が社会の存続にとって不可避である限り、同化もまた望ましくもあり、不可避であると判断されるのであるが、現実を見る限り自己の期待との間に距離が存在することも事実であり、自説の合理的説明のためには、もう一つの視点（説明装置）がどうしても必要であった。そして、そこに一つの独創的な社会学的概念が用意されることになった。マージナル・マン (marginal man) の概念がそれである。マージナル・マンは、同化のステージに向けたプロセスにおいて現れる人間像と理解することができる。それは、同化を期待し、現実＝同化の困難さを直視するとき、あるいはrace relation cycle の論理的破綻を回避しようとするとき欠くことのできない概念であった。

### 国家の理念と社会学—結語に変えて—

既に述べたところを繰り返すならば、同化は、新移民やマイノリティにとってアンビバレントな

概念である。ドミナント・グループに同化することは、ある意味でマイノリティとしての自己の生活世界から脱することであり、ドミナント・グループの価値こそが、アメリカという国家の基礎であるということ承認することである。アメリカの社会と国家の文化的目標は、そして、その目標を達成するための制度的手段の構築はそのようなものとして存在した。仮に同化がそうしたものとしてある限り、ドミナントの価値は、単にドミナントという範疇を超えて、アメリカにおける社会体制にとっての、アメリカという国家にとっての中核、見方を変えれば、「公共の基準」を形成する。パークが「自然地域」と呼んだ移民のコミュニティやジェーン・アダムスがハル・ハウスで援助と教育の対象とした新移民は、アメリカのドミナント・グループからみれば、多分に異国あるいは異国民という意味合いを残しており、その限りで同化の対象であった（前出）。

シカゴにおけるコミュニティ—シカゴ学派の都市社会学が関心を寄せた移民の「諸コミュニティ」は、デューイやヴェブレンの理想とする農村あるいは古きアメリカにおける伝統的な「コミュニティ」とは別物であった。大都市における、あるいはシカゴにおけるそれは産業資本主義の産物であり、ヴェブレンやデューイの理念とするコミュニティとは対照的なものであった。デューイをしてハル・ハウスへ向わせたのは、ハル・ハウスの状況が—現実の都市の「諸コミュニティ」が、彼の理念とする価値やその価値を付与してきたアメリカの伝統的なコミュニティと明らかに異なっていたからである。その意味で、ミルズ (Mills, W) が、デューイにおける行為論の特質として、「統制」と「調整」を指摘している点は興味深い洞察といわなければならない。デューイによれば、シカゴの「諸コミュニティ」は統制と調整の対象であった。「諸コミュニティ」すなわち移民の諸コ

コミュニティはアメリカの伝統的なコミュニティに、言葉を換えて言えば、ニューイングランドのヤンキー・ピューリータンに同化されるべき対象であった（内藤辰美、2001）。しかし、タウンミーティングにおける隣人と大都市シカゴの移民における隣人は全く異質であった。大多数の民衆に遵法心と公共的秩序の尊重があったニューイングランドの世界と、移民のコミュニティは距離があり過ぎた（Bryce V.J、270～271）。自由に対する熾烈な欲望と個人主義的な独立独行と自助の精神を持ちながら、なお、団体的な行動に意義を認めていたタウンの人びと（Bryce V.J、同上、270～271）と、資本主義の発達によって階級的な規定を受けて大都市にやってきた 18 世紀後半から 19 世紀の初めにかけての移民では、アメリカという社会構造の中における位置が全くちがっていた。にもかかわらず、あるいはそれゆえに、同化は夢として追及されてきたのである。

確かにジェーン・アダムスとハル・ハウスの中心テーマは、移民を「アメリカ化」すること、「アメリカ人」にすること、同化に置かれていた。しかし、それは彼らのアメリカ社会への適応を前提としたものであって、同化の問題が適応を超えて存在したわけではない。適応にとどまらず、同化までを射程に入れ、公共の問題の解決に期待を寄せていたジェーン・アダムスは、やがて、ハル・ハウスの活動に限界を意識する。プルマンの失敗やボス政治の存在に、そして自らのハル・ハウスに限界を認めたアダムスは、社会改革を通じてアメリカの再生を志向することになる。アダムスが期待した同化とアメリカは遠のいた。それを如実に示したものが（それを彼女に意識させたものが）移民排斥問題であった（内藤・佐久間、2013、219～254）。「1920 年代のジェーン・アダムスを悩ませたもうひとつの問題は、ますますつのる移民排斥の声であった。移民はアメリカ社会の生命

であり、貴重な構成要素である、と彼女はかねがね考えていた。いうまでもなくインディアンを除いてすべてのアメリカ人は移民の子孫である。彼女の意見によれば、いわゆる「移民問題」の原因は、移民たち自身ではなく、むしろアメリカの社会、経済生活の不正に由来する点が多かった。機会さえ与えられれば外国生まれの移民も優れたアメリカ人になることができる。ハル・ハウスが存在するのは、その過程を促進するためであった」（Nash R. 1978=1989 足立康訳、166）。しかし、「この時代のアメリカ人の多くは、彼女の考えに同意しなかった。彼らの目には、移民たち、特に南欧、東欧出身者の非アーリア系移民たちは、アメリカの都市問題の不幸な犠牲者としてではなく、その原因として映っていた。「100%純血主義」の支持者たちは、しだいに移民排斥を声高く主張するようになった。なかでも画期的な役割を果たしたのは、1910 年、合衆国移民問題調査委員会が発表した 42 巻の報告書、いわゆる〈ディリンガム委員会報告〉であった。悪、犯罪、貧民靴などの現象と移民との相関関係を綿密に、だが、はなはだしい偏見をもって論じたものである。一般向け出版界も、たちまち同様の「結論」を氾濫させはじめた」（Nash R. 1978=1989 足立康訳、同上、166～167）。「第 1 次大戦が終わると、何百万もの人々が新大陸に安住の地を求めたために、移民問題はにわかに関急の課題となった。・・・肝をつぶした議会は、移民を制限する緊急立法を行い、明白な人種差別に基づいた出身国別の移民割り当て制度を確立した。・・・ジェーン・アダムスから見ると、それは 3 世紀にわたるアメリカの夢の、悲しく無情な終焉であった。アメリカはもはや機会と希望の同義語ではなくなったのである」（Nash R. 1978=1989 足立康訳、同上、167～168）。ジェーン・アダムスに突き付けられた「限界」、それは移民の同化や適応の問題を単に個人

のレベルで処理するという方法への疑問であった。

移民における同化と適応の問題は、一面、個人の問題である。しかし、それは同時に、民族集団間の問題であり階級的・国家的問題でもある。「アメリカに入ってくる移民というもっとも重要な事実、つまり、新しい移民の波がおしよせるごとに、前の移民の低い階級的地位の肩がわりをして、それ以前の移民の地位を押しあげていったという事実もまた、構造的・階級的地位を不明確にすることにあずかって力があつた。こうして地位問題のかわりに環境に「適応」し、同化され、アメリカ化される個々の移民といった、個人差に関連づけて問題を分析する病理学者特有の視角が生ずるのである。移民をもふくんだ階級構造の問題ではなく、個人の国家への同化をふくんだ移民問題として、問題を設定する傾向が一般化した。何人かの人間がアメリカ的ヒエラルヒーを昇っていくことができたという事実が、階級の上限をみきわめるチャンスを少なくする。このような条件の下では、構造なるものも変動的・非本質的なものと考えられ、階級的地位ではなく、地位的態度に関連づけて説明されるようになるのである」(Mills W. 1963=1971 青井和夫・本間康平監訳28)。もちろんミルズのこの批判は、直接パークに向けられたものではない。文中に示されているように、その批判は直接的には社会病理学者に向けられたものである。しかし、ミルズの指摘をひとつの脈絡から理解すれば、その批判は狭く、社会病理学者とおぼしき人びとにのみ向けられていないことは明らかである。ミルズの批判は、同化主義者あるいは同化への強い期待を持つ人々にみられる方法論的限界を指摘し、適切にも階級的地位と個人的態度を峻別して、同化や適応の問題への見直しを示唆している。

先にみたエツィオーニは、「社会過程には多く形態がある。同化を cycle の最後のステージに位

置づける必要はない」と主張する (Etzioni A., 前出)。一般に同化は「相異なる個人ないし集団がそれぞれ相異なる生活や経験の接触ないしは浸透を通じて文化や行動の様式を共有し、同質的な文化や伝統を持つに至る過程」であり、適応は「個体が環境に対して適合的な行動や態度をとること」である (浜島明・竹内郁郎・石川晃弘編、1977)。これまで、同化と適応の概念は曖昧にされてきた。少なくとも適応と同化の間の距離を短く考え、同化を cycle の最後のステージに位置づける発想を受け入れてきた。しかし、パーク=ワースの理論が仮説であり、検証前の理論であると認識される、いま、適応と同化には慎重な活用が必要である。直截に言えば、適応と同化を峻別することで、同化なしの適応を考えることが可能である。もし、アメリカ民主主義の発展や都市における公共の問題において重要なのは適応であって、同化ではないという見方が成立すれば、アメリカの民主主義や都市における公共の問題と移民の位置づけに幅のある理解と展望を見出すことも可能であろう。よく知られるようにマートンは適応の様式に関する彼の考察の中で、適応を、当該社会における文化目標と制度的手段の関係として理解するよう主張した (Merton R.K. 1947=1961 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳)。アメリカ民主主義の発展させることや都市における「公共」問題の克服を、同化から、あるいは同化と一体化させて始めることはない。しばしば同化の可能性を強調する人びとの間にみられるひとつの限界は、彼らが文化目標 (同化、メルティングポット) を強調するときそれを制度的手段と一緒に論じていないということである。かつてキタノ (Kitano, H.) はパークのモデルについてふれた際、「このモデルが最高の機能を発揮するのは均等な機会が存在するときであり、しかも二つの文化の双方に相手側を理解しようとする意志があるときだけであ

る」と指摘した (Kitano, H. 1969=1974 内崎以佐味訳, 166)。先に見たジェーン・アダムスによれば、機会さえ与えられれば外国生まれの移民も優れたアメリカ人になることができる。ハル・ハウスが存在するのは、その過程を促進するためであった。<sup>2)</sup>

もとよりここで適応と同化を区別しようとするわれわれの試みには、同化の問題を研究の対象にすべきではないという主張は一切含まれていない。むしろわれわれは同化の問題を現代においてもなお重要な研究課題として認識する。おそらく民族文化の隔合という問題は国際化の進行する今日一層緊急性を帯びるに違いない。そうした状況の中で、適応と同化の間に混同のないよう注意を促すのは、同化の問題を偏見やステレオタイプ化された民族文化から解放して論じたいと思うからである。

同化主義の立場からすれば、あるいは終生同化に理想を抱き同化に期待を寄せていたパークの立場に立ってみても、言葉を換えて、都市を公共的なものにするためには同化が不可欠であると認識にする人々に同意してみたとしても、同化は理想の域に存在した。アメリカは、そしてアメリカの都市社会とは、その理想を実現するには程遠い状況におかれていた。そしてパークの race relation cycle も、依然、期待の域にあるといえるであろう。<sup>3)</sup>

## 註

- 1) パークらのそうした試みは、ある意味で、アメリカ社会学をアメリカ的なものにするために避けて通れない要請であったけれども、必ずしもその試みは好意的に受け入れられなかった。ルイス・コーサー (Cosser, L.) によれば、創設期の社会学者と後の社会学者はその性格を異にする。コーサーはいう。それは、社会学者の、社会改良家か

らアカデミック・コミュニティの構成員へ所属替えであり、社会闘争から適応の問題に関心を移す社会学者の姿であった。社会学者は社会動学よりも社会静学に関心を寄せるようになり、自らの支持層を闘争志向の団体から闘争を極小化することに重きをおく集団に移しているとコーサーは主張する。「創設期の社会学者たちは、自らを社会改良家であるとみなし、彼らの読者層にたいして改良家としてはたらきかけた。そのような社会学者の自己像と世間一般の風潮とが、闘争状況にたいして注意を促した。・・・闘争は単にネガティブな事象としとらえられるだけではなくて、きわめてポジティブな機能を果たすものとみなされた。・・・次の世代の社会学者たち、とりわけシカゴ学派の後継者たちは、やや異なった状況に直面した。・・・パークの著作は、それがアカデミックなコミュニティの枠を越えて外部に浸透したかぎりにおいて、人種関係のみならず、都市改良や都市改善の団体にとっても重大な関心の的となったけれども、急進的な人びとや改良をめざす人びとにはほとんど影響を与えなかったようである。・・・現代社会学を支配する社会学者の大多数は、みずからを改良家とみなしたり改良家の支持層に訴えかけたりするどころか、純粋にアカデミックで専門的な読者層にたいして自己の態度を明らかにするか、公的および私的な官僚制度における意思決定者の間で発言の機会を得ようとするかのいずれかである。彼らは、闘争よりもむしろ適応の問題に、社会動学よりも社会静学に、もっぱら関心を集中させる。・・・初期のアメリカ社会学たちが闘争を志向する集団—弁護士・改良家・急進論者・政治家—を自らの支持者とみなして語りかけたのにたいし、後期の社会学者たちは、もっぱら、共有価値を強化し、集団闘争を極小化することに関係している集団や職業団体、すなわち、ソーシャル・ワーカー、精神衛生の専門

家・宗教的リーダー・教育者・ならびに公的・私的な管理者などのなかに、自分たちの支持者を見出した。後期における改良運動の相対的な弱さ、および、行政の仕事のなかに社会科学のサービスを要求する官僚構造の台頭によって、支持者層のこのような変化が促進された。この変化にともない、社会学者の多くの自己イメージは、改良への自覚的主張というそれから、人間関係の「調停者」および人間関係の専門家という自己イメージへと移りかわった」(Coser, L. 1956=1973 新陸人訳3-23)。

- 2) もう一度いえば同化と適応は明確に異なる概念である。何故ならば同化なしの適応も十分に考えられてよいからである。民族多元論者はもとより同化主義者の見解に強く身を寄せる論者を別にすれば、同化なしの適応がありうるということについては同意を得られよう。いま、そうした理解に立ってアメリカにおける日本人移民—日系アメリカ人について見ればアメリカにおける日本人移民＝日系アメリカ人の適応にはかなり肯定的な評価が与えられることになるかもしれない。事実、そうした見方を肯定する資料がないわけではない。そのひとつは、コーディル・デヴォース等の試みたシカゴにおける日系人の調査である(レヴィストロース=祖父江孝男訳『文化人類学—リーディングス—』誠信書房)。この調査結果によれば、元来、日本の文化、社会構造、価値観および宗教は、アメリカのそれとは相容れないものと考えられていたにもかかわらず、シカゴの日本人移民(日系アメリカ人)はアメリカ社会に十分に適応していたのである。この場合日本人はアメリカ社会に適応していたと考えることはできるが、必ずしも同化していたということではできない。適応と同化を同一次元でとらえるなら、日系アメリカ人の大部分がアメリカ社会に適応できない人間として扱われることになるという予想も可能である。

事実排日論者はアメリカ社会に同化できない日系人を強調した。社会学者パークはそうした人びとの主張に懐疑的であった。

- 3) パークの race relation cycle に関する秋元律郎の指摘(秋元、2002)には好井裕明の批判があるが、ここでは言及しない。私見によれば、社会学者としてのパークは同化=自然史的過程としての同化に執着した。「レイス・リレーション・サーベイの観点からみれば、太平洋岸での事態は、多分に、政治の問題というよりも、通常に考えられる行動の問題—集合行動の問題である」(Park R.E. Behind Our Masks, Survey Graphic, May, 1926, 139) という発言は、パークが、同化の問題を、裏返して排除の問題を、もっぱら政治的問題とすることに、あるいは国家的問題とすることに同意していなかったことを示唆するものである。もしそうした理解に立ってみれば、パークの、「いづれ」という自然史の見方には、排日移民法を不自然なもの意識するパークの姿勢が潜在しているとみることもできるのではないか。1926年に書かれたこの論文は race relation cycle の仮説についてふれている論文としてしばしば注目されているが、この論文の中で、パークは、アメリカ太平洋岸における東洋人の排斥運動と立法上の措置の目的が、アジアからの移民を単に制限することではなく、停止させることにあること、さらには、アメリカの太平洋岸が、ここでヨーロッパが終る人種的辺境とみなされていることに関心を寄せつつ、東洋人排斥に関する一連の措置に対しては懐疑的な態度を示している。パークによれば人種的な差異の基盤をなす地理的孤立は文明の普及により崩されてきており、長期的に見た場合、アメリカに限らず、人種的辺境を維持することは極めて困難である。パークの race relation cycle に関する仮説は、人種的接触—競争—闘争—応化—同化という一連の過程が、前進的で取り消すこと

のできないものであることを強調する。パークは、「それを抽象的に述べれば、接触、競争、応化そして最後の同化という形をとるレイス・リレーション・サイクルは明らかに前進的なものであり、逆行不可能なものである。関税規制、移民制限、そして人種の壁等は前進のテンポを弱めるかもしれないし、一時的にはその動きを完全に停止させることがあるかもしれない。しかしその方向を変えることはできないし、ともかくその方向を逆流させることは不可能である」(Park, R.E. Our Racial Frontier on the Pacific, Survey Graphic, 1926, 192～196) と主張するとともに、アメリカ太平洋岸の現実に対して、「かつては中国人に対するひどい敵意がみられたけれども、今や太平洋岸の態度は一般に温和であり寛大ですらある」(Park, R.E. 同上、1926) という認識を示し、かなり楽観的な予測—彼のアメリカ社会への期待—を表明したのである。しかし、この問題についても、歴史はパークの予想通り進んでいない。この問題については、排日移民法、第二次世界大戦下における日系人の強制収容所と合わせて、続稿、佐久間美穂「同化における社会と国家—排日移民法をめぐるアメリカと日本」を用意することにしよう。

## 引用・参考文献

- Adams J. *Twenty Years at Hull-House*, The Macmillan Company 1951=1969 柴田善守訳『ハル・ハウスの20年』岩崎学術出版会
- Bryce V.J. *Modern Democracies*, Macmillan Company, 1921 = 1929 松山武訳『近代民主政治』岩波書店
- Burgess E. The Growth of the City, in Park and Burgess ed. *The City*, Univ. of Chicago Press, 1925 = 1965 奥田道大訳「都市の発展—調査計画序論一、鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房
- Coser L. *The Functions of Social Conflict*, Free Press 1956=1973 新睦人訳『社会闘争の機能』新曜社
- Durkheim, E. *De la division du travail social*, F.Alcan, 1893=1971 田原音和訳『社会分業論』青木書店
- Etzioni A. The Ghetto—A Re-Evaluation, *Social Force*, 37, march, 1959.
- Hughes, E.C. *Race and culture*, F.P への序文、1937
- Kitano, H., *Japanese American—The Evolutions of Subculture*, Prentice Hall, 1969=1974 内崎以佐味訳『アメリカの中の日本人—一世から三世までの生活と文化—』東洋経済新報社
- Lipset, S.M. Changing Social Status and Prejudice—The Race Theories of a Pioneering American Sociologist—, *Commentary* 1950, May
- Lyman, S. The Race Relations Cycle of Robert E. Park, *Pacific Sociological Review* 1968, Spring
- Merton R.K. *Social Theory and Social Structure* 1947=1961 森東吾・森好夫・金沢実・中島竜太郎訳、『社会理論と社会構造』、みすず書房
- Mills W. *Sociology and Pragmatism, arrangement with Brandt and Brandt*, 1964=1969 本間康平訳『社会学とプラグマティズム』紀伊国屋書店
- Mills W., *Power, Politics and People*, Oxford Univ. Press, 1963=1971 青井和夫・本間康平監訳『権力・政治・民衆』みすず書房
- Nash R., *From These Beginning: A Biographical Approach to American History*, Harper and Row, 1978=1989 足立康訳『人物アメリカ史』新潮社
- Park R. E. and Burgess E. *Introduction to the Science of Sociology*, Univ. of Chicago Press, 1921.
- Park R. E. The City—Suggestions for the Investigation of Human Behavior in the Urban Environment. A.J.S. (March, 1916) =1965 年笹森秀雄訳「都市—都市環境における人間行動のための若干の示唆—」鈴木広訳編『都市化の社会学』誠信書房

- Wirth, L. *The Ghetto*. Univ. of Chicago Press, 1928=  
1971 今野俊彦訳、『ユダヤ人と疎外社会』新泉社  
秋元律郎『現代都市とエスニシティーシカゴ社会学を  
めぐって』早稲田大学出版部、2002
- W. コーディル・G. デヴォース 尾高京子訳「日系人  
のパーソナリティー特にアチーブメントへの意欲  
をめぐって」レヴィストロース・祖父江孝男訳  
編『文化人類学—リーディングス—』誠信書房、  
1968
- 内藤辰美『地域再生の思想と方法』恒星社厚生閣、  
2001
- 内藤辰美・佐久間美穂「ブルマンとハル・ハウス」(内  
藤辰美・佐久間美穂『中心と周縁—タイ・天草・  
シカゴ—』春風社、2013)
- 浜島明・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典』有斐  
閣、1977

